

後記 雑感

この紀要も今や二十号。いわば成人に達したことになる。このことを、まずは創刊者、元館長の大野先生に御報告しなければならぬ。そしてこの紀要をここまで育て上げられた編集者茂木さんに、心から感謝したいと思う。

図書館の仕事のなかには、人の目につかない、形となつて後に残らないようなものもある。業務の機械化は進めていかなければならないが、裏方の精神は、図書館にとって大切である。

しかしまた、図書館の仕事が、全体として知識をとり扱うものであるからには、私たちもみずからそのための知識をみがくのでなければ、サービスの向上は期し難い。そのような研鑽の成果を発表する場として、この紀要がある。

そして同時に、今日ただ今の仕事は、おろそかにしないという意味で、執筆は勤務時間外に行うことを当初からの方針とし、また奨励のために、投稿に対して原稿用紙一冊?をいただいたことはあったが、原稿料はなしでやってきた。

館外からの御寄稿に対して、改めて御礼申上げるとともに、館内執筆者皆様の

労をねぎらいたい。そしてより多くの方がたの新たな投稿を、切に待ち望むものである。
(高宮秀夫)

「可憐な豆本に囲まれて——寸本由来を説く元の市島早大図書館長」の見出しで、大正十四年三月二十三日付東京日日新聞に写真入りの市島春城の談話記事が掲載されている。「和漢洋一千三百部(三千余冊)の寸本を集め得て、常に座右にそれらの小書籍を積み重ねてたのしんでいる」という記事である。たまたま、この豆本については、大正一五年刊行の「春城隨筆」に春城自身の論放が収載されているが、本年五月刊行された丸谷才一編「ポケットの本机の本」に再録されている。「私は公私のため十萬に近い書物をこれ迄蒐集した。性来書物好きで、今でも毎日書物漁りを日課のやうにしてゐる」とその書出しにある。

こんなことを書き出したのは、近來、学術資料のシステム化について、種々構想され、コンピュータの進歩とともに具体化されつつあるが、一方、歴史的古文獻についても見なおされはじめているからである。春城が、豆本については、「全体小形の体は取扱の煩はしいもので、図書館あたりでも嫌つてをる」とあるよ

うに、図書館で収集したわけではないが、拓本・書翰にしろ、いわゆる一枚もの、断簡零墨の類でも大事な学術資料に変わりは無い。ともあれ、昨年「古書談叢」として春城の典籍関係の文八七編をあつめて刊行され、書誌学者として改めて見なおされていることは、よろこばしいことである。
(中沢 保)

大学は三年後に創立一〇〇周年を迎えますが、最近その記念事業計画に関する委員会の報告が発表されました。この事業計画の一つに、総合学術情報センター(仮称)の設置が挙げられています。この計画の骨子は「新中央図書館」「情報処理施設」および「共同利用研究施設」を本部キャンパス周辺地域に建設し、近年における学術情報の量的増大と質的多様化に対応した学術情報システムを総合的に確立しようとするものであります。優れた研究の展開を図るためには、最新の学術情報を常時的確・迅速に入手・利用し得るようすることは必要な条件であり、この面での整備と改善が強く要望されている今日、記念事業に相応しい計画と言えます。

東京専門学校創立の時に校舎の一隅に設けられた図書室は、大学の発展の歴史

と共に拡充・整備されて来ました。大正十四年には「学園の懸案であり、学徒の憧憬の的であった」現図書館が、やはり記念事業として建設され現在に至っています。しかし半世紀を過ぎた今では二度の増築にもかかわらず、書庫をはじめ閲覧室など全てが狭隘となり、その機能を十分に果し得ないのが現状であります。図書館が今後ますます重要な役割を分担していくためには、今こそ、この計画について真剣に取り組まねばなるまい。

(寺本辰雄)

▽建学百年もう目前。この百年間という意味は、無数の内容を孕むのであるが、たとえば、それを二十繋いだけでキリスト生誕の時代にまで遡ってしまう。

▽紀元一世紀も遠いようで、百年ずつに区切れば、ずい分手近いもの。日本の国を知らなかったイエスが、向こうの丘の上に見えるような身近ささえ覚える。

▽建学百年というのと遠いようで、十年ずつに区切れば、それを十繋いだ先に、烈々たる老侯を始めとする学祖たちの息吹きが、歴々と身近なところに存在するのである。その息吹きを、われわれの血流の中にまず蘇らせることが、今度の百年の第一の記念事業なのであらう。

▽大野実雄館長の真率な意欲で、わが館の根幹の精神を、梁骨を示すものとして創刊された本誌も、昭和三十四年以來、大学の十区切りの歴史のうち、すでに二区切りの二十年のわが館の歴史の側面をこの二十号で刻んだことになる。

▽この間の本誌の有形無形の意義は大きく、その業績は、今号に付した索引に歴然と現われており、多くの人たちの心血の結晶として尊重されるべきであろう。司書とは館の何かに憑かれた者の謂か。

▽『視聴覚資料目録3』『文書目録2』と本誌十九・二十号を手伝い、後任渡辺君への職ともなり、いまは静かに眼が限れる。

(茂木莞秀)

本誌も二十号を無事に迎えることが出来た。延べ二八八人、三、七八頁という集大成となり、本号に掲載した「早稲田大学図書館紀要記事索引」の館内・外でのご活用を編集部の一人として改めて願うものです。

さて、本誌第一号が誕生した昭和三十四年頃のことを調べると、「国立国会図書館が再出発の第一年として、新館への移転に対する準備に入った」とある。奉仕の能率向上、業務の積極化、国会ブラス国立という二重の性格の統一・調和を課題として、また、館界との協力体制を作り、専門の技術を重視して司書監、主任

司書が設けられた。当時、この国会図書館の再出発は「注目に値する」との世評を受けた。しかし、昨今の「評判」のほどは……。

この秋には、我が早稲田も創立百周年を目前に控え、「新図書館」学術情報センター」などの記念事業の内容が決定される。記念事業の進行の中で、図書館の山積された難問を解決していくこととなるが、まず、長期的展望を共通認識として持つことが第一であろう。また、学内三十数箇所にも分散する学内図書施設を直視するならば、再編整備は避けられないであろう。

最後に、この二十年間一貫して、本誌一号の編集後記に「……大学における図書館の役割は、ますます重要であります。そのあり方いかんは、大学の進運、ひいては日本の学術文化の発展に影響するところ多大であり、館員の使命の重いといふことを痛感いたします」と載せられたことが叫ばれる。二十年の永い間、茂木さんご苦労さまでした。

(渡辺洋二)

早稲田大学図書館紀要 第二十号

昭和五十四年三月二十日 発行

編集兼 網集兼 高 宮 秀 夫
発行人 印刷所 早稲田大学印刷所

発行所 早稲田大学図書館